

2、「甲子園」という言葉はチームプレーの象徴 ―日学株式会社の文化事業「黒板アート甲子園」―

「黒板アート」の生みの親・日学

「黒板アート」という言葉は、黒板・ホワイトボードのトップメーカー、日学株式会社（本社・東京）が2015年からスタートしたコンテスト「日学・黒板アート甲子園」から使われるようになった。それまでは黒板に絵を描いたものはネットなどを中心に発表されていたが、さまざまな呼び名が使われていた。それが「黒板アート甲子園」が行われるようになって、「黒板アート」という言い方が普及するようになった。2021年の大会ではメイン大会の高校生の参加が1444名（作品数

135点・学校数62校）、中学生が637名（作品数67点・39校）と過去最高の数字を示した。多くの生徒や美術担当教師が、「黒板アート」を目指すようになった。現在、すでに最初の大会に参加した高校生の中には、美術系大学に進学し、黒板アートの作品を制作している学生もいる。この「黒板アート甲子園」は、日学の吉田朋弘社長の発案によって始められた。たまたま見たという、ネット上の「黒板の落書き」というカテゴリの中から、人気アニメのシーンを描写したものや、古典絵画を模写

したものなど、さまざまな黒板の絵を見つけた吉田社長は、その多彩さに目を向けた。



日学株式会社 吉田朋弘社長

「われわれが黒板に持っているイメージは基本的には教具です。先生が書くものであって、生徒が描いたりすると先生に怒られるので、こっそりやるものなんですけど、そこにアートする、そんな面白いことをする若い子たちがいるんだと驚きました」と同時に、武蔵野美術大学の三澤一実教授が進めている「旅するムサビプロジェクト」（後述）の中で行われている「黒板ジャック」をテレビで知った。武蔵美

の学生が訪問する高校に事前に行って教室の黒板に絵を描いておき、登校した高校生を驚かせて、来訪をアピールするという美術教育に繋がる活動だが、ここからも「アート甲子園」へのヒントを得ている。「これは盛り上がりすぎてきそうだなと思いました。そうなった時に、黒板メーカーとして何かで

きることはないのか、評価してあげる方法はないのかと考えて、やれるとしたらコンテストだと。それをフェイスブックに書いたら、友達から「いいね」「いいね」と帰ってきたので、その気になったということです。2014年に準備をはじめて、2015年の1月から3月までの春の募集でスタートしたのが「黒板ア

ト甲子園」のプレ大会。黒板アートは消されるという宿命を持っていますので、アーカイブという形で残すということも重要です」。

このコンテストの「黒板アート」という命名は分かるが、「甲子園」というのは、もう一つ的主旨がこめられている。前述のMVの動画のために黒板アートを描いた生徒たちも、チームで描くのが黒板アートは楽しいと言っていたように、時間を共有する制作が魅力の一つとなっている。

「スタート段階で、私は頭の中で〈甲子園〉と付けたいと思っていたんですよ。〈甲子園〉とつく以上は、夏の甲子園。高校野球の一番素晴らしいところはチームワークで、3年間しかない青春の時間を共有して、一つのことを成し遂げるという素晴らしい。もし〈黒板アートコンテスト〉という名前です。スタートしていたら、生まれてなかった甲子園と名前が付いている以上

チームでやらなければ意味がないということです。結果的に、やっている生徒さんからするとそこが一番楽しい」。チームでなければ出品できないという「黒板アート甲子園」は、こうしてまず高校生の間で、参加者を増やし、中学生と裾野を広げていった。黒板だけでなく、2019年からはホワイトボード（白板）、2020年からは動画と、募集ジャンルを増やしている。この活動は、外務省が日本の文化の魅力を海外に紹介する「ジャパンビデオトピックス」にも取り上げられ、数ヶ国語で海外に発信されている。文化的な活動として、一層の広がりを見せようとしている。「黒板アート甲子園」をやった黒板が売れたことは一度もないですよ」と吉田社長は笑って語るが、貴重な文化活動を展開している企業が、美術の世界を活性化している。教室だけでなく、黒板アートは徐々に公共的な催事にも活用されている。



2020年 日学特別賞 聖ヨゼフ学園高等学校 / らりんとせな / 2人 作品名：暮れなずむ頃



社内に展示されている黒板アート